

氏名	橘 智靖
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第 5 6 8 1 号
学位授与の日付	平成30年3月23日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 機能再生・再建科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	Glottic cancer in patients without complaints of hoarseness (嗄声症状のない声門癌)
論文審査委員	教授 豊岡伸一 教授 木浦勝行 准教授 山根正修

### 学位論文内容の要旨

嗄声は声門癌患者が病院を受診する最も一般的な自覚症状である。嗄声と声門癌の予後の関係についてほとんど報告がない。本研究では嗄声症状のない声門癌の頻度と特徴を調査し、嗄声症状の有無で声門癌の予後を比較した。1994年から2012年の間に初期治療を行った声門癌371例（男性349例、女性22例）を対象とした。371例中32例（8.6%）は嗄声を自覚していなかった。25例は耳鼻咽喉科、7例は上部消化管内視鏡もしくは気管支鏡検査によって発見された。stage IおよびT1の割合は、嗄声症状なしの群で有意に高かった（stage I,  $p=0.0036$ ; T1,  $p=0.0004$ ）。嗄声の有無で、疾患特異的生存率に有意差は認めなかった（ $p=0.133$ ）。本研究では、嗄声症状のない声門癌はより早期に診断された。更なる症例の蓄積により、嗄声症状のない声門癌の生存率がより良好であることを導き出せる可能性がある。嗄声症状がなくても声門癌の兆候を見逃さないことが重要である。さらに、内科医に上部消化管内視鏡または気管支鏡検査に際して喉頭の観察を促すことによって、声門癌予後の改善につながりうる。

### 論文審査結果の要旨

嗄声は声門癌患者の自覚症状として最も一般的な症状であるが、嗄声と声門癌の予後の関係についての報告は少ない。

本研究では嗄声症状の有無に注目して、声門癌の予後について検討し、嗄声症状が声門癌の予後不良因子である可能性を示唆した。

委員からは嗄声症状と予後因子である病期の関係について質問があったが、嗄声症状を有する症例は進行度が高いとの回答がなされ、嗄声症状の予後との関係がここでも強く示唆された。

本研究は嗄声が生じる前の声門癌発見の重要性を示唆した知見を得たものとして価値のある業績と認める

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。